

# INVITATION

Ehime University Hospital [愛媛大学医学部附属病院広報誌]

VOL

37

2014

## ◎特集 安心な医療ができる環境を目指して

DOCTOR'S VOICE 01 地域医療連携の推進力となる地域医療ネットワーク協議会

DOCTOR'S VOICE 02 耳鼻咽喉科・頭頸部外科学 新任教授 羽藤直人

DOCTOR'S VOICE 03 地域医療再生学講座 新任教授 久門良明



ようこそホスピタルパークへ

## 地域包括ケア時代の、医療連携のプラットフォームづくりを目指して

総合診療サポートセンター長 榎本真幸

「地域医療ネットワーク協議会」は、いわゆる5疾病6事業対策を推進するために、愛媛県下の実情を踏まえた医療機関のネットワーク構築について、協議し推進する機関として設置されました。未曾有の少子高齢化の中で、現医療体制は変革を余儀なくされており、身近な生活の場で医療や介護が行われる「地域包括ケアシステム」を中心に据えて検討することが求められています。先端医療を提供する急性期病院においても、できるだけ速やかに、患者さんを地域生活にお戻しすることを重視した体制づくりが急務です。今後行政や医師会を中心に、県の医療ビジョンの骨組みが提案されていく中で、積極的に参画していくことが当協議会の役割だと思っています。地域特性を踏まえて、病院の立場から具体的にどう取り組んでいくかを検討する必要があり、それらを実現する人材育成にも力を入れていかなければなりません。

確かに我が国は国民皆保険の中で、世界最高レベルの医療システムを構築しましたが、一方住民の医療依存度を下げないまま、医療費抑制策が断行され、医療崩壊と言われる現状を招くことになりました。高齢化の中で、患者さんの生活を重視し、患者さんがその人らしい生き方を全うできるような体制が必要とされ、「してあげる医療」から「支える医療」「求められる医療」へと、医療の目的も変化しています。住民の医療への過剰依存を見直し、地域包括ケアシステムの中で、医療及び介護のネットワークに、いかに既存の地域資源を巻き込み活かしていくかが問われています。

当院では、総合診療サポートセンター（TMSC）を昨年度設立し、入院前に患者さんの希望（求め）や苦痛（辛さ・気がかり）を把握し共有することで、退院後の生活を見据えて多職種が連携し、患者さんがスムーズに生活へ戻れるよう、その体制づくりに奮闘努力中であります。そもそも医療も介護も共助のシステムです。患者さんが医療や介護に依存せず、自ら自分らしい生き方ができるように、医療が他の資源と連携して、地域を支えていく必要があると考えています。「べったり医療・べったり介護」ではなく、「ときどき医療・ときどき介護」を目指して、高齢者が医療・介護支援を受けながらも地域の中で活動し貢献できるようになれば、地域は活性化され高齢者にとっても生きがいとなるはず。地方大学病院として、地域医療ネットワーク協議会を核として「医療ビジョン」作成に参画し、またTMSCを通じて、地域包括ケアシステム推進のために、急性期病院の改革を模索し、そして、患者さんの生活を重視した医療の大切さを地域に広げるとともに、学生たちにもしっかりと教育していきたいと夢を抱いています。



### PROFILE

ひつもとしんいち◎1979年愛媛大学医学部卒業、医学博士。ヘルスプロモーション、保健医療福祉マネジメントなどを専門に活躍。卒業後同大学助手、愛媛県の保健所長や健康増進課長などを経て、2002年8月より当病院医療福祉センターに。2013年に総合診療サポートセンターを立ち上げセンター長として現在に至る。公衆衛生マインドとぶれないことをモットーに、大学・医療から発信する地域づくりに奮闘中。録画しておいた推理TVドラマを妻と見ることがストレス解消法。



### 感謝状贈呈式及び懇談会を開催しました。

平成26年6月24日（火）、当院ボランティア団体「いきいき会」の方々に対し、感謝状贈呈式及び懇談会を行いました。ボランティアには現在206名の方が参加しており、今回は活動時間が通算200時間、500時間に達した方など計12名に対し、病院長から感謝状が贈られました。懇談会では、ボランティアの方々の様々な意見が飛び交い、今後も現場の声をもとに、よりよい環境の中での治療等、充実したサービスの提供を目指します。

### 愛媛大学医学部連携病院長会議組織図

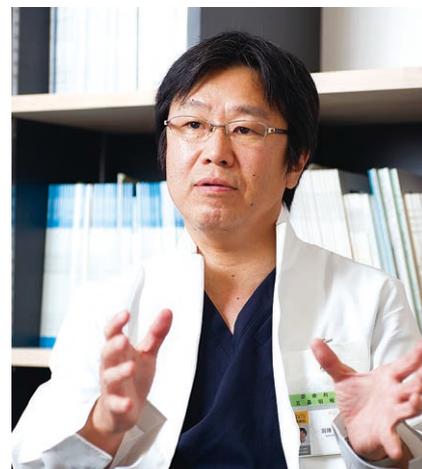


## 地域医療への貢献と最先端医療を両輪に

耳鼻咽喉科・頭頸部外科学 教授 羽藤直人

当院では1983年に世界で初めて人工中耳の臨床応用を行いました。現在は、聴覚を失った方の耳に人工内耳を埋め込むことによって、日常生活では困らない程度の聴覚を取り戻すことができる時代になっています。愛媛県では当院が唯一の人工聴覚器埋め込み手術の認可施設であり、関連施設と連携して、手術から患者さんの療育、リハビリテーションまでを行っています。また、新しいコンセプトデザインで人工聴覚器の開発にも取り組んでおり、まだ数年はかかると思いますが、難聴患者さんのために製品化を目指しています。

私は研究・教育・臨床のバランスを重視しています。日々の診療を大切に、患者さんの治療をしながら、病態解明や新しい治療法開発を行い、それらを未来の患者さんへ還元していく。同時に、耳鼻科医の将来を担う人材の育成を行うことが重要であると考えます。新しい研究を行わなければ医療の進歩はないわけですから、愛媛から世界に向けて新しいエビデンスを続々と発信できるよう、若手の耳鼻科医をしっかり教育していきます。当教室は昔から風通しのよい明るい環境でしたが、今後も皆で助け合いながら魅力ある教室づくりを心掛けたいと思います。研究・教育・臨床のバランスというのは、時代の流れによって重み付けが変わっていきます。感覚をさらに研ぎ澄まし、常に修正をしながらバランスを取り続けていきたいと思っています。



### PROFILE

はとうなおひと◎愛媛県出身、1989年愛媛大学医学部卒業、医学博士。1999～2001年スタンフォード大学留学、2008年に愛媛大学医学部准教授を経て、2014年から現職。専門分野は神経耳科学（主に鼓室形成術、顔面神経麻痺、人工聴覚器領域）。趣味はゴルフとセーリング。

## 患者が望む医療を提供できる地域医療体製造りと継続性

地域医療再生学講座 教授 久門良明

「地域医療再生学講座」は、深刻な医師不足や高齢化問題を抱える宇摩地区の医療再生を図るため、平成22年に愛媛県からの寄附により開設されました。宇摩地区の医師の皆さんは非常に重い負担を抱えながら、孤軍奮闘されています。様々な課題を解決するため、単に大学病院から医師を派遣するのではなく、宇摩地域の基幹病院と大学病院の連携を円滑に進めることが当講座の最大の役割と考えます。若い医師が地域でも専門医としてのキャリアをつめるシステム創りが必要であり、システムを「できるシステム」に変えなくてはならないと強く感じます。また、地域の医療機関とは勿論、行政との連携も欠かせません。四国中央市では、すでに市役所と保健所が脳卒中の医療連携に加わっており、これをモデルケースとしてアピールすることで、県下の他の地域でも同じような取り組みができればと思います。

教育面では、学生や若い医師の意識を地道に変えていく努力をしていきたいです。現場を担う医師として、地域医療の現状や重要性を伝えていきます。また、先輩医師としては、彼らに研究する気持ちを失わないでほしいと伝えたいです。物事を解決する手法というのは、研究する過程で学んでいくのではないのでしょうか。本質をつかむための努力を忘れないでほしいです。そして、教科書で勉強しなさいと伝えたいです。ネットでは全体像を掴むことが難しく、応用がきかなくなってしまう。研究マインドや好奇心を育て、物事を俯瞰的に捉える力を身につけてほしいと思います。



### PROFILE

くもんよしあき◎高知県出身、1977年県立和歌山医科大学卒業。日本脳神経外科学会・日本脳卒中学会専門医、日本神経内視鏡学会認定医、日本脳卒中協会愛媛県副支部長。1979年愛媛大学脳神経外科学講座に入局し、県立中央、県立今治、市立宇和島病院にも勤務。脳梗塞の基礎研究、脳卒中・脳腫瘍手術に専心、2014年から現職。

# 愛媛大学医学部附属病院 センター・施設トピックス

お気軽にご相談ください

## ホスピタルパークが完成



今回表紙を飾っているホスピタルパークは平成26年4月1日(火)、当院北側の市道との境界に完成しました。このパークは、憩い、和み、癒しを感じることできる空間となることを目指して整備を行ったものです。パーク内には季節を感じさせる木々の他、ベンチも数カ所設置しています。当院への外来者だけでなく地域の皆様にとっても憩いの場となることを願っています。是非、お立ち寄りください。

施設課  
☎089-960-5160

## 植込型補助人工心臓実施施設及び脳死肝移植実施施設に認定



平成26年1月、当院が植込型補助人工心臓手術実施施設に認定され、同年2月13日、中四国初となる手術を実施しました。従来の体外型に比べ、流量性能が良く、感染や出血などの合併症の可能性が低くなります。また、平成25年11月には全国でも数少ない脳死肝移植実施施設の認定を受けました。今後、愛媛県や近県で脳死肝移植を希望する人は、審査の後、日本臓器移植ネットワークに登録申請を行い移植を行うことが可能となりました。

総務課企画・広報チーム ☎089-960-5943

## 当院初となるドクターカーを導入



平成26年4月15日(火)、各種医療機器を搭載したドクターカーを導入しました。これまでは、傷病者を救急車で搬送してから治療等が行われていたため、時間がかかり、救命率の低下に繋がっていました。今回の導入で、災害(救急)現場で、初期診断・医療行為を行うことができ救命率の向上が期待されます。当院では大規模災害時等、愛媛県知事などから要請があった場合に出勤させ、災害復興等に従事する予定です。

救急部 ☎089-960-5722

## 白衣授与式を実施



平成26年4月24日(木)、医学科5年生を対象に第6回白衣授与式を行いました。この授与式は平成23年度から実施しており、今回は病棟実習の資格を得た116人の医学生がstudent doctorとして認定されました。授与式では、安川正貴学部

長から医師の道を歩む者への激励の言葉があり、それに対し、学生代表者から「真摯に実習に取り組みたい」との決意が述べられました。その後、学部長・病院長をはじめ、各教授がネームの入った白衣を羽織らせ、堅い握手と激励を行いました。

116人の学生は、これから医師を志す者としての自覚を再確認するとともに、student doctorとして病棟実習に臨みます。病棟実習では、患者様からのご協力・同意を得ることが前提となっています。実習を通じてチーム医療の重要性等を学び、将来の医療を担う人材となることを期待し、ぜひご協力くださいますようお願い申し上げます。

学務課 ☎089-960-5170

## 編集後記

長かった梅雨もようやく明け、いよいよ夏本番となりました。表紙を飾っているホスピタルパークも当初に比べ緑豊かになってきました。今はまだまだ小さな花や木たちですが、成長を見守りながら四季折々の表情をお楽しみください。さて、本号では35号、36号に引き続き、連携病院長会議における3専門部会のうちの1つである地域医療ネットワーク協議会、4月より新たに教授となった羽藤先生、久門先生の意気込みをご紹介します。また、医学部新5年生は平成26年4月に行われた白衣授与式を機に病棟での実習を開始しています。将来の大きな財産となる経験をつみあげられるよう温かくも厳しくご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

広報委員会委員長 高田清式

◎表紙  
— ホスピタルパーク —



愛媛大学医学部附属病院

〒791-0295 愛媛県東温市志津川 ☎089-964-5111(代)  
ホームページ <http://www.hsp.ehime-u.ac.jp/>